人間失格

和のかのでとれる。 別人の如く怒られそうな気がしてたまらず、逢うのに 頗るおっくうがる性質でしたので、いよいよ、銀座は敬遠の 形 でしたが、しかし、そのおっくうがるという性質は、けっしょれん こうかっ ではなく、女性というものは、休んでからの事と、朝、起きてもりからの事との間に、一つの、塵ほどの、つながりをも持たせず、完全の 忘 却の こと の で、 の で、 の で の で と せいうものは、 な 現 ま で で の で の で と で が かんぜん ほうきゃく で が からの事との間に、 の で と さ で が かんぜん な 現 象 を、まだよく の で が く 、 見事に 二つの世界を切断させて生きているという不思議な 現 象 を、まだよく み こんでいなかったからなのでした。 十一月の末、自分は、 堀木と神田の屋 かんだ で 安 で を飲み、 この悪友は、 その屋台を出てからも、 さらにどこかで飲もうと 主 張 し、もう に かんちにはお金が無いのに、 それでも、飲もうよ、とねばるのです。 その時、自分は、 酔って大胆になっているからでもありましたが、

「よし、そんなら、夢の国に連れて行く。おどろくな、酒池肉林という、・・・・・・」

「カフエか?」

「そう」

い 「行こう!」

というような事になって二人、市電に乗り、堀木は、はしゃいで、

^{こんや おんな う かわ} じょきゅう 「おれは、今夜は、女 に飢え渇いているんだ。女 給 にキスしてもいいか」

じぶん ほりき 自分は、堀木がそんな酔態を演じる事を、あまり好んでいないのでした。堀木も、それを し 切っているので、自分にそんな念を押すのでした。

「いいか。キスするぜ。おれの傍に坐った女給に、きっとキス

して見せる。いいか」

「かまわんだろう」

「ありがたい!おれは 女 に飢え渇いているんだ」

ではいているボックスに堀木と向い合って腰をおろしたとたんに、ツネ子ともう一人の女給が走り寄って来て、そのもう一人の女給が自分の傍に、そうしてツネ子は、堀木の傍に、ドサンと腰かけたので、自分は、ハッとしました。ツネ子は、いまにキスされる。

間しいという気持ではありませんでした。自分には、もともと所有慾というものは薄く、また、たまに幽かに惜しむ気持はあっても、その所有権を敢然と主張し、人と争うほどの気力が無いのでした。のちに、自分は、自分の内縁の妻が犯されるの

を、黙って見ていた事さえあったほどなのです。自分は、人間のいざこざに出来るだけをいりたくないのでした。その渦に巻き込まれるのが、おそろしいのでした。ツネ子とじぶんとは、一夜だけの間柄です。ツネ子は、自分のものではありません。惜しい、なども思い上った慾は、自分に持てる筈はありません。けれども、自分は、ハッとしました。自分の眼の前で、堀木の猛烈なキスを受ける、そのツネ子の身の上を、ふびんに思ったからでした。堀木によごされたツネ子は、自分とわかれなければならなくなるだろう、しかも自分にも、ツネ子を引き留める程のポジティヴな熱は無い、ああ、もう、これでおしまいなのだ、とツネ子の荷を見較べ、にやにやと笑いました。

にんげんしっかくおんな 人間失格 女 だったのでした。案外とも、意外とも、自分には霹靂に撃ち酔漢のキスにも 価 いしない、ただ、みすぼらしい、貧乏くさい飲んでみたい気持でした。所謂俗物の眼から見ると、ツネ子は笑するのでした。ました。「お酒を。「やめた!」「さすがのおれも、こんな貧乏くさい女には、……」自分は、小声でツネ子に言いました。それこそ、 一部でるほど閉口し切ったように、腕組みしてツネ子をじろじろ眺め、と堀木は、お金は無い」 「をゆがめて言い、

しかし、

じたい じつ おも 事態は、実に思いがけなく、もっと悪く展開せられ

くだかれた思いでした。自分は、これまで例の無かったほど、

にんげんしっかくかくご しまれていなかったのです。どこかに「遊び」がひそん生きて行けそうもなく、そのひとの提案に気軽に同意しました。金、れいの運動、女、学業、考えると、とてもこの上こらえてようでしたし、また、自分も、世の中への恐怖、わずらわしさ、言葉がはじめて出て、女も人間としての営みに疲れ切っていたでいました。めやな。うちが、かせいであげても、だめか」「だめ」その日の午前、二人は浅草の六区をさまよっていました。喫けれども、その時にはまだ、実感としての「死のう」というそれから、なかりも休んで、夜明けがた、女の口から「死」という

うていたら、本気か。 $\overset{\scriptscriptstyle{\flat}}{\times}$ てくれないのだもの。ややこしい切れ

^{ちゃみせ} 茶店にはいり、牛 乳 を飲みました。

しゅうち「あなた、払うて置いて」たもと自分は立って、たもとからがまできた出し、ひらくと、銅銭が三枚、せいさんのうり羞恥よりも凄惨の思いに襲われ、たちまち脳裡にうかぶものは、仙遊館の自分の部屋、制服と蒲団だけが残されてあるきりで、あとはもう、質草になりそうなものの一つも無い荒り流たる部屋、他には自分のいま着て歩いている一番である。マント、これが自分の現実なのだ、生きて行けない、とはっきり思い知りました。自分がまごついているので、女も立って、自分のがま口をのぞいて、「あら、たったそれだけ?」 無心の声でしたが、これがまた、じんと骨身にこたえるほどに痛かったのです。はじめて自分が、恋したひとの声だけに、

いた 痛かったのです。それだけも、これだけもない、銅銭三枚は、どだいお金でありません。 それは、自分が未だかつて味わった事の無い奇妙な屈辱でした。とても生きておられない屈辱でした。所詮その頃の自分は、まだお金持ちの坊ちゃんという種属から脱しずっていなかったのでしょう。その時、自分は、みずからすすんでも死のうと、実感として決意したのです。

その夜、自分たちは、鎌倉の海に飛び込みました。女は、この帯はお店のお友達から借りている帯やから、と言って、帯をほどき、畳んで岩の上に置き、自分もマントを脱ぎ、同じ所に置いて、一緒に入水しました。

ずのひとは、死にました。そうして、自分だけ助かりました。自分が高等学校の生徒ではあり、また 55 の名にもいくらか、所謂ニュウス・ヴァリュがあったのか、新聞にもかなり大きな

^{もんだい} 問題として取り上げられたようでした。

じぶん うみべ びょういん しゅうよう せられ、故郷から親戚の者がひとり駆けつけ、さまざまの始末をしてくれて、そうして、くにの父をはじめ一家中が激怒しているから、これっきり生家とは義絶になるかも知れぬ、と自分に申し渡して帰りました。けれども自分は、そんな事より、死んだツネ子が恋いしく、めそめそ泣いてばかりいました。本当に、いままでのひとの中で、あの貧乏くさいツネ子だけを、すきだったのですから。

下宿の娘から、短歌を五十も書きつらねた長い手紙が来ました。「生きくれよ」というへんな言葉ではじまる短歌ばかり、五十でした。また、自分の病室に、看護婦たちが陽気に笑いながら遊びに来て、自分の手をきゅっと握って帰る看護婦もいました。

自分の 左 肺に故障のあるのを、その病 院 で発見せられ、これがたいへん自分に で発剤でな事になり、やがて自分が自殺幇助罪という罪名で病 院 から警察に連れて い行かれましたが、警察では、自分を病 人 あつかいにしてくれて、特に保護室に収容 しました。深夜、保護室の隣りの宿 直 室 で、寝ずの番をしていた年寄りのお巡りが、 あたれ」と言いました。自分は、わざとしおしおと 宿 直 室 にはいって行き、椅子に腰 かけて火鉢にあたりました。「やはり、死んだ 女 が恋いしいだろう」

「はい」

きぇぃ へんじ ことさらに、消え入るような細い声で返事しました。

「そこが、やはり人情というものだ」

^{かれ しだい おお かま き} 彼は次第に、大きく構えて来ました。

「はじめ、女 と関係を結んだのは、どこだ」

ほとんど裁判官の如く、もったいぶって尋ねるのでした。彼は、自分を子供とあなどり、秋の夜のつれづれに、あたかも彼自身が取調べの主任でもあるかのようによれる。 はいだん かいだん めいた 述 懐を引き出そうという 魂 胆のようでした。自分は素早くそれを察し、噴き出したいのを怺えるのに骨を折りました。そんなお巡りの「非公式な訊問」には、いっさい 答を拒否してもかまわないのだという事は、自分も知っていましたが、しかし、秋の夜ながに 興を添えるため、自分は、あくまでも神妙に、その

お巡りこそ取調べの主任であって、刑罰の軽重の決定もそのお巡りの思召し一つに在るのだ、という事を固く信じて疑わないような所謂誠意をおもてにあらわし、彼の助平の好奇心を、やや満足させる程度のいい加減な「陳述」をするのでした。

「うん、それでだいたいわかった。何でも正 直 に答えると、わしらのほうでも、そこは $\tau^{cc2.565/40}$ 手心を加える」

「ありがとうございます。よろしくお願いいたします」

ほとんど 入 神 の演技でした。そうして、自分のためには、何も、一つも、とくにならない \mathfrak{g} なのです。

 $_{50}^{10}$ あ $_{50}^{10}$ しょちょう よびだ 夜が明けて、自分は署 長 に呼び出されました。こんどは、本 式の取調べなのです。

_{しょちょうしつ} ドアをあけて、署 長 室にはいったとたんに、

いいおとこ 「おう、いい男だ。これあ、お前が悪いんじゃない。こんな、い

^{おとこ} う ^{おまえ} い 男 に産んだお前のおふくろが悪いんだ」

色の浅黒い、大学出みたいな感じのまだ若い署長でした。いきなりそう言われて自分は、自分の顔の半面にべったり赤痣でもあるような、みにくい不具者のような、みじめな気がしました。

この柔道か剣道の選手のような署長の取調べは、実にあっさりしていて、あのしんやの表述査のひそかな、執拗きわまる好色の「取調べ」とは、雲泥の差がありました。 訊問がすんで、署長は、検事局に送る書類をしたためながら、

「からだを丈 夫にしなけれゃ、いかんね。血 痰が出ているようじゃないか」

と 言いました。

その朝、へんにでが出て、自分はでの出るたびに、ハンケチで

と 言いました。

それから

かくへいき **核兵器**

で出て素で、

しん真

そし

_{ちょう} 長 は、

けんじきょく おく しょるい 検事局に送る書類をしたためながら、

「からだを丈夫にしなけれや、

いかんね。

りしていて、

この柔道か剣道の選手のような署長の取調べは、

じっ 実にあっさ

あの深夜の老巡査のひそかな、

っんでいのさ 雲泥の差がありました。

じんもん 訊 問 がすんで、署 執 拗 きわまる 好 色

の「取調べ」とは、

た

きなりそう言われて自分は、

いる。あさぐる

^{だいがくで} かん しょちょう 大 学出みたいな感じのまだ若い署 長 でした。

じぶん かお はんめん 、自分の顔の半面にべったり赤痣で

^{おとこ} っ ^{おまえ} い 男 に産んだお前のおふくろが悪いんだ」

もあるような、

^{ふぐしゃ} みにくい不具者のような、

_き みじめな気がしまし

ていたのですが、そのハンケチに赤い^{あられ}が降ったみたいに血がついていても覆っていたのですが、そのハンケチに赤い^{あられ}が降ったみたいに血がついていて、たのです。けれども、それは、のどから出た血ではなく、昨夜、耳の下に出来た小さいおできをいじって、そのおできから出た血なのでした。しかし、自分は、それを言い明さないほうが、使宜な事もあるような気がふっとしたものですから、ただ、

と、伏眼になり、殊勝げに答えて置きました。

「はい」

しょちょう しょるい か ぉ ま 長 は書 類を書き終えて、

「起訴になるかどうか、それは検事殿がきめることだが、お前の身元引受人に、電報かでんた。 まょうはまん けんじきょく 電話で、きょう横浜の検事局に来てもらうように、たのんだほうがいいな。誰か、あるだろう、お前の保護者とか保証人とかいうものが」

こっとう

なか、ヒラメに似ているというので、父はいつもその 男 をヒラメと呼び、自分も、そう呼びなれていました。

自分は警察の電話帳を借りて、ヒラメの家の電話番号を捜し、見つかったので、ヒラメに電話して、横浜の検事局に来てくれるように頼みましたら、ヒラメは人が変ったみたいな威張った口調で、それでも、とにかく引受けてくれました。

「おい、その電話機、すぐ 消 毒 したほうがいいぜ。何せ、血 痰 が出ているんだから」

じぶん 自分が、また保護室に引き上げてから、お巡りたちにそう言

いつけている 署 長 の大きな声が、保護室に坐っている自分の耳にまで、とどきました。 お昼すぎ、自分は、細い麻縄で胴を縛られ、それはマントで隠すことを許されましたが、その麻縄の端を若いお巡りが、しっかり握っていて、二人一緒に電車で横浜にでかいました。 けれども、自分には少しの不安も無く、あの警察の保護室も、老 巡査もなつかしく、嗚呼、自分はどうしてこうなのでしょう、罪人として縛られると、かえってほっとして、そうしてゆったり落ちついて、その時の追憶を、いま書くに当っても、本かにのびのびした楽しい気持になるのです。しかし、その時期のなつかしい思い出の中にも、たったひとした。 冷汗三斗の、生涯 わすれられぬ悲惨なしくじりがあったのです。自分は、検事局の薄暗い一室で、検事の簡単な取調べを受けま

した。検事は四十歳前後の物静かな、(もし自分が美貌だったとしても、それは謂わば じゃいんの美貌だったに違いありませんが、その検事の顔は、正しい美貌、とでも言いたいような、聡明な静謐の気配を持っていました)コセコセしない人柄のようでしたので、自分も全く警戒せず、ぼんやり陳述していたのですが、

とつぜん れいの咳が出て来て、自分は 神 からハンケチを出し、ふとその血を見て、この咳 突然、れいの咳が出て来て、自分は 神 からハンケチを出し、ふとその血を見て、この咳 もまた何かの役に立つかも知れぬとあさましい駆引きの 心 を起し、ゴホン、ゴホンと こつばかり、おおおげさまけの贋の咳を大袈裟に附け加えて、ハンケチで口を覆ったまま検事の顔をちらと見た、間一髪、

「ほんとうかい?」

ものしずかな微笑でした。冷汗三斗、いいえ、いま思い出しても、きりきり舞いをしたくなります。中学時代に、あの馬鹿

の竹一から、ワザ、ワザ、と言われて脊中 せなかを突かれ、地獄に蹴落けおとされた、そのとき おもいじょうといっても、決して過言では無い気持ちです。あれと、これと、二つ、じぶん しょうがいに お えんぎ だいしっぱい きるく けんじ ものしず ぶべっ あ自分の 生涯 に於ける演技の大失敗の記録です。検事のあんな物静かな侮蔑 ぶべっに遭うよりは、いっそ自分は十年の刑を言い渡されたほうが、ましだったと思う事さえ、とき 時たまある程なのです。

じぶん きそゅうよ 自分は起訴猶予になりました。けれども一向にうれしくなく、世にもみじめな気持で、 けんじきょく ひかえしっ こし ひきとりにん なく 葉 検事局の控室のベンチに腰かけ、引取り人のヒラメが来るのを待っていました。

はいで たか まど ゅうや そら み かもめ おんな じ かたち と 背後の高い窓から夕焼けの空が見え、鴎 ^{かもめ}が、「女」という字みたいな 形 で飛んでいました。

だいさん の手記

1

たけいち ょげん ひと あた ひと け 一の予言の、一つは当り、一つは、はずれました。 \mathfrak{s} 惚れられるという、名誉で無い \mathfrak{s} きげん 予言のほうは、あたりましたが、きっと偉い絵画きになるという、祝 福 の予言は、

はずれました。自分は、わずかに、粗悪な雑誌の、無名の下手な漫画家になる事が出来ただけでした。